

自衛隊協力映画における「某国」のスパイ ～『亡国のイージス』と『名探偵コナン プライベート・アイ 絶海の探偵』の比較から

須藤遙子¹

はじめに

2022 年に入ってから、北朝鮮によるミサイル発射が相次いでいる。その数は、金正恩総書記が権力の座についた 2011 年末以来最多でかつてないペースであるという。このような現実、映画というフィクションにどのような影響を与えるのだろうか。

本稿では、自衛隊が公的に協力する一般劇映画の中でも、北朝鮮をイメージさせる人物が登場する二作品を選び、公開当時の国際関係との関連に注目しながらその表象を分析する。扱う作品は、2005 年 7 月に公開された阪本順治監督『亡国のイージス』と、2013 年 4 月に公開された静野孔文監督『名探偵コナン こうぶん
プライベート・アイ
絶海の探偵』である。

「某国」の工作員が登場する福井晴敏原作の『亡国のイージス』には、海上自衛隊と航空自衛隊が全面協力している。2005 年は、北朝鮮の核問題、韓国との竹島問題、中国における反日デモなど、東アジアの緊張と各国のナショナリズムが高まっていた時期である。中国と尖閣諸島で睨みあい、当時の橋下徹大阪市長の慰安婦発言で韓国との関係が悪化し、北朝鮮の核問題が大きく取り沙汰されていた。

『名探偵コナン プライベート・アイ
絶海の探偵』では同じく海上自衛隊が全面協力し、イージス艦を舞台にストーリーが展開する。2013 年 6 月 10 日付のシネマトゥデイニュースによれば、公開から 51 日間の累計成績は、動員 291 万 5894 人、興行収入 35 億 940 万 6150 円で

興行ランキング 4 週連続 1 位、当時 17 作目となる『名探偵コナン』シリーズ歴代最高興収記録を更新した。この人気アニメーションシリーズ『名探偵コナン』で自衛隊が登場するのは初めてということで大きく宣伝され、主要キャラクターの一人である女性一等海佐の声を人気女優の柴咲コウが担当したことでも話題を呼んだ。この作品では、コナンらが「ある国のスパイ 'X' 」に関係する事件に巻き込まれていく。

2013 年も 2005 年同様に、東アジアの緊張が高まっていた時期である。北朝鮮は 2013 年 2 月に 3 回目の地下核実験に成功したと発表しており、依然として周辺諸国に核の脅威を与えていた。日中関係を見ると、2010 年 9 月に尖閣諸島沖で中国漁船と日本海上保安庁巡視艇との衝突事故があり、2013 年 1 月には、中国海軍艦船が海上自衛隊護衛艦「ゆうだち」に対して射撃用の火器管制レーダーが照射するという事件が起こっている。韓国との関係も、2012 年 8 月 10 日に李明博大統領が竹島（韓国名、独島）に上陸したことで急速に悪化していた。こうした一連の動向には、2012 年 12 月に発足した安倍政権の東アジアに対する強硬姿勢も大きく影響していることは言うまでもない。

以上のような同時代史的背景のなかで、ポピュラー文化としての映画やアニメーションで表象される「敵」としての東アジア人像の影響は小さくない。ましてや子どもも主要なターゲットである人気アニメーションで、一つのステレオタイプとしてこうしたキャラクターが登場することには問題が多いと言わざるを得ないだろう。利益最優先の文化産業が軍事組織である自衛隊の協力を得、さらに「ウケる」要素としてのナショナルな世相を反映しながら構築するイデオロギー的メッセージの問題性を指摘するのが、本稿の目的である。

自衛隊協力映画とは

本稿における「自衛隊協力映画」とは、「部外製作映画に対する防衛庁の協力実施の基準について」（2007 年の改正で「防衛省」に変更）という防衛事

¹ 東京都市大学 メディア情報学部 教授

務次官から各長に出された通達に基づき、「訓練の環境」という名目で、自衛隊員の出演のみならず戦車・戦闘機・艦艇（いわゆる戦艦）をも含む各種施設や資材等が無償で提供された一般劇映画を指す。協力開始の1960年から60年以上に及ぶ自衛隊の映画協力は、野党からの批判で1970-80年代は協力が中断したが、協力再開の1989年以降は毎年1〜4本ほど継続して行われ、製作側からのオファーが続いている状態だ。近年話題になった自衛隊協力映画には、2016年7月公開『シン・ゴジラ』や2021年3月公開『シン・エヴァンゲリオン劇場版』などがある。

自衛隊協力映画といっても、全てが戦争映画というわけではなく、また全てがプロパガンダ映画と判断できるわけでもない。自衛隊協力映画の作品内容は、ヒューマンドラマ、時代ファンタジー、青春映画、恋愛映画、動物映画などと様々であり、格別軍事的な表象や国家的メッセージが強調されていない場合の方がむしろ多い。これらの作品群は特に「自衛隊協力」が意識されることなく、一邦画作品として気軽に消費されていると考えられる。

また、自衛官が活躍する内容が含まれていても、法に則っていなかったり、現実の自衛隊組織や活動と大きく乖離したりしている場合は、公的な協力はなされない。たとえば2019年5月公開の『空母いぶき』は、元航空自衛隊エースパイロットが空母の艦長という、現実の組織では有り得ない設定だった上に、専守防衛でなく武力行使を肯定する内容であることから、協力のクレジットは無かった。

ただし、2005年以降に公開された作品からは、明らかにイデオロギー性が混入してくると判断できる。「愛国」や「自己犠牲」、組織への「忠誠」や「連帯」などの政治的メッセージが、大胆にストーリーに盛り込まれるようになってくるのだ。この年からは「自衛隊の協力」自体も売り文句として大々的に宣伝されており、これには前述した2005年当時の社会的背景が大きく影響していたといえるだろう。

『亡国のイージス』について

『亡国のイージス』は、自衛隊協力映画の27本目にあたる。日本ヘラルド映画・松竹・電通・バンダイビジュアル・ジェネオンエンタテインメント・IMAGICA・TOKYO FM・産経新聞社・デスティニーの9社による製作である。2000年頃から日本では製作委員会方式が定着し、多くの企業が薄く広くリスクと利益を分け合うかたちで、映画製作とその後のメディア展開を行うビジネスモデルが一般的になっている。自衛隊協力映画もこうした「ビジネス」として各種企業が製作に携わっていることをまず指摘しておきたい。『亡国のイージス』は2005年公開の邦画ランキングにおいて、興行収入20.6億円・12位となっている。

ストーリーは以下のようなものであった。東京湾沖で訓練航海をしていたイージス艦が、自衛官として潜入していた複数の人物によって乗っ取られる。犯人は、ヨンファという外国人テロリスト（中井貴一）と、日本国家や自衛隊のあり方に不満を持ち、ヨンファの思想に共鳴した副艦長（寺尾聰）だった。彼らは、沖縄米軍基地から奪った特殊兵器によって東京を壊滅させることで、それぞれの意図を実現させようとする。彼らの意図を阻止しようとする政府側は、イージス艦ごと爆破する計画を進めるが、イージス艦に乗っていた前任伍長（真田広之）と一人の自衛官（勝地涼）は、そのどちらをも回避し、人命を守ろうと奮闘する。テーマは「テロとの戦い」であり、外国人テロリストの国籍は「某国」とされているが、明らかに北朝鮮が想定されている。

当初防衛庁は『亡国のイージス』への協力を拒んだが、映画協力に積極的な当時の石破長官の働きかけでシナリオが若干変更されて、協力されたという経緯がある。紆余曲折を経て実現した防衛庁および海上自衛隊と航空自衛隊の全面協力は史上初であり、まずその協力自体が大きく宣伝された。撮影は大型オープンセットを使用してのかなり大掛かりなものであり、こちらもマスコミの話題となった。

テロの首謀者のヨンファ（図1）は、非常に冷酷

な人物として描かれており、彼の言葉には「日本」や「日本人」に対する侮蔑が随所に見られる。「君たちには、恥も誇りもないのか」「その状況認識の甘さは、いかにも日本人らしいな」「自らの手で平和を勝ち取ったことのない貴様らに何がわかる」「いつになったら貴様らは、これが戦争だということを理解するんだ!」というように、国家の危機に際してもどこか他人事のような日本の空気を挑発し続ける。

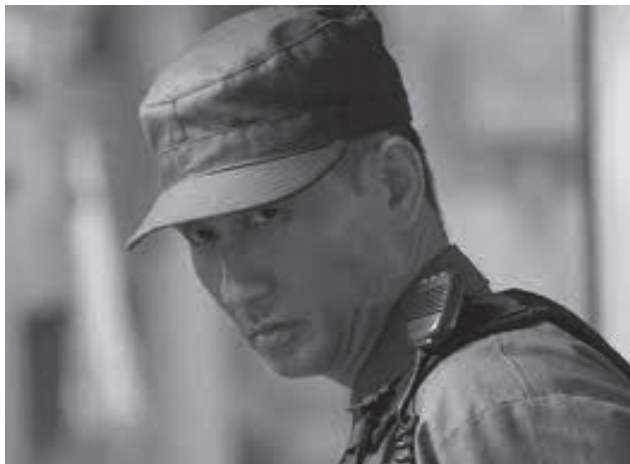


図1 工員ヨンファ（中井貴一）

しかし、北朝鮮人テロリストの言葉を借りながら、実は日本人ナショナリストが「平和ボケ」の日本人に対して抱いている苛立ちや、外敵の脅威を強調することで軍事的装備の正当性を強調する意図が表現されているといえなくもない。産経新聞の主張が与党・自民党タカ派の思想とオーバーラップするのは周知の事実であり、製作委員会に名を連ねるデスティニーは、2007年公開『ミッドナイトイーグル』、2011年公開の『聯合艦隊司令長官 山本五十六 太平洋戦争70年目の真実』などの自衛隊協力映画の中でも愛国的な作品を手がけている企画・制作会社である。

この作品で表象されている北朝鮮人像は、日本人として十分通用するような「同じ」アジア人の顔を持つ一方で、日本人とは全く「違う」内面を持っている。彼らは凶暴であり、日本人は良くも悪くも生ぬるい。彼らは自らの犠牲さえ厭わぬほど国家を第一に考えているが、日本人は国家や民族の誇りも捨て、生まれた時から存在した平和の中で安穏と生き

ている。その対比の中で、日本のナショナリズムを鼓舞する意図が見え隠れする。つまり、この作品で描かれた北朝鮮あるいは北朝鮮人は、日本あるいは日本人なるものを再構築するための対抗物であり、同時にお手本でもあるのだ。

『名探偵コナン 絶海の探偵』について

自衛隊協力映画の36本目にあたる『名探偵コナン 絶海の探偵』は、1994年5月から『週刊少年サンデー』（小学館）で27年を超える最長連載記録を更新中の大ヒットマンガ作品の劇場版である。『名探偵コナン』のテレビアニメは、1996年1月より読売テレビ・日本テレビ系列にて現在でも放映されており、劇場版は1997年より2021年現在まで毎年春に1本ずつ公開されている。本作品の製作委員会は、小学館、読売テレビ、日本テレビ放送網、小学館集英社プロダクション、東宝、トムス・エンタテインメントの6社で構成されている。

舞鶴港でイージス艦の体験航海に参加していたコナンたちが、艦内に潜入した「某国」のスパイXが起こす事件解明に臨むというストーリーで、「コナン史上かつてない究極のスパイ・ミステリー」と宣伝された。本編には無いシーンだったが、予告編での「このままでは日本が危ない!」というコナンのセリフは、テレビCMにも使用されていたため、作品自体を観なかった人々にも届いただろう。明確には言及されていないが、「日本にはない部品やデータ」を使用している「爆弾を積んだ不審船」という設定は、2001年に海上保安庁の船と銃撃戦になった末に自爆撃沈した北朝鮮工作船を当然ながら想起させる。

アニメーションのキャラクターとしても、スパイは明らかに東洋人（図2）として描かれ、工員の一人には竹川（図3）という日本名がついていた。



図2 スパイX



図3 竹川という名の工作員

ただし、本作品の中心はあくまでコナンによる次々に起こる事件の謎解きであり、ストーリーにおいてスパイの国籍や凶暴性などが過度に強調されていたとはいえない。むしろ注目されるのは、予告編や公式ホームページで過剰なまでに宣伝された「防衛省・海上自衛隊全面協力」の文字である。まず、作品ではイージス艦の外観や内部が精密に描かれており、その機能がテロップ付きでかなり丁寧に紹介される。見学に訪れているキャラクターたちは、それぞれ「カッコいい!」「すごい!」と称賛や感嘆の言葉を連発する。パンフレットでも劇中少年探偵団3名が紹介するという形式で、見開き2ページにわたってイージス艦に関するデータや歴史など様々な情報を載せており、同じくイージス艦への賛辞が彼らの台詞として書かれている。また、やはり見開き2ページで「はたらく女性自衛官」についても紹介されており、歴史や仕事が解説してあった。これは、明らかに自衛隊による将来のリクルート活動への協力と

みなせるだろう。

パンフレットによれば、静野監督以下主要スタッフらは横須賀や舞鶴で停泊中のイージス艦に実際に乗って取材をしており、その「興奮」と海上自衛隊への「感謝」を異口同音に語っている。たとえば、脚本担当の櫻井武晴は「セリフに関しても防衛省の方から『こうした方がリアルです』とご提案いただいた」と証言している。筆者が2012年までに3回行った防衛省への取材から、シナリオまで相当踏み込んだ「協力」がなされたことは間違いないだろう。

スパイは日本人の小学生を自分の息子であるかのごとくふるまわせ、抽選に当たって見学に来た親子としてイージス艦に搭乗していた。子どもは人質になっている本当の父親を危険にさらさないようにスパイの言いなりになっていたが、最後には勇気を出して告発する。注目すべきは、「勇気」がその子どもの名前でもあったことだ。櫻井は「何よりも一番大切なのは“強い心”です」と言い、「たとえ子供でも、人が勇気を持って行動したときに、そこから全てが始まる」という意味で、この子どもを「勇気」と名づけたと証言している。その勇気は、東アジアの敵に向けられているともいえるだろう。

まとめ

2本の作品とも「凶暴な隣国」としての北朝鮮人テロリストが描かれ、そのイメージはマスコミで流布されているステレオタイプに沿ったものだったといえる。特に『名探偵コナン 絶海の探偵』^{フライング・アイ}では、子どもたちが敵に立ち向かう姿が印象的だった。前述の『ミッドナイトイーグル』にも北朝鮮人テロリストが登場しているが、同じく凶暴なイメージと同時に、「圧政に苦しむ可哀そうな北朝鮮一般市民」というもう一つのステレオタイプも投影されていた。このようなステレオタイプの敵国像に対抗するかたちで日本のナショナリズムが再構築されようとしていたと同時に、日本のナショナリズムを再構築するために、こうした異国民・異民族のステレオタイプが生産・再生産されているともいえるだろう。マス・

メディアによって流布されるステレオタイプと映画の表象は、相互に影響し合いながら強化されていくことになる。

2013年は、『名探偵コナン 絶海の探偵』の1週間後に公開された陸上自衛隊・航空自衛隊協力の佐藤信介監督『図書館戦争』、4月から6月まで放送されたTBSドラマ『空飛ぶ広報室』、12月21日には『永遠の0』という特攻隊映画が公開されており、自衛隊協力映画の「当たり年」だった。東アジアの緊張が高まっている時期に自衛隊協力映画が増える傾向は、残念ながら存在するといえる。

自衛隊の協力はなかったものの、2019年5月に公開された若松節朗監督『空母いぶき』は、尖閣諸島をめぐる中国との武力衝突を描くストーリーで、現実政治をリアルに反映した作品として注目に値する。2022年2月からのロシアによるウクライナ侵攻により、台湾有事についても話題にのぼる回数が増えてきた。米中の対立が激化する現代において、今後は自衛隊協力映画でも「某国」として中国がイメージされる作品が登場する可能性は大いにある。東アジアのナショナリズムが常態化した時代に、自衛隊が公的に協力するフィクションにおける敵の表象には、これからも注意が必要だろう。

参考文献

- [1] 須藤遙子, 「‘文化政策’としての自衛隊協力映画
～1990年代以降の作品群にみる現代ナショナリズム」谷川建司他編『コンテンツ化する東アジア
大衆文化・メディア・アイデンティティ』2012年、
青弓社。
- [2] 須藤遙子, 『自衛隊協力映画: 『今日もわれ大空に
あり』から『名探偵コナン』まで』2013年、大月書店
- [3] 須藤遙子, 「自衛隊協力映画『ミッドナイトイーグル』分析～犠牲精神と現代のナショナリズム～」
社会文化学会年報『社会文化研究』第13号、2011年